

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 19 日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2008 ～2011

課題番号：20592578

研究課題名（和文） がんの子どもへの教育支援プログラムと連携システムに関する基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental Study of a Systematic cooperation between Educational Support Program for Children with Cancer and Medical Institution

研究代表者

大見 サキエ（おおみ さきえ）

研究者番号：40329826

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：小児看護、がんの子ども、教育支援、連携システム、学校、医療者、復学支援、

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、がんの子どもや家族が入院時、入院中、退院時において学習の遅れやクラスメートとの関係が途絶えてしまうという不安や元の学校に復学する際の不安を緩和するために、教育支援プログラムと学校と医療機関との連携システム構築のための基礎的研究をすることであり、以下のことを計画した。①学校の教員の小児がんの知識や子どもや同胞を含む家族への理解が促進されるように研修会を開催する。②がんの子どもへの退院時調整（合同）会議を行い、医療者との連携を強化し、子どもが安心して復学できるようにする。③復学支援の充実しているアメリカの現状を視察し、教育支援プログラムとシステム構築の参考にする。④がんの子どもについてどのような説明が効果的であるのか、検討するために、小学校、中学校、高校生への意識調査を実施し、特に小学生への説明用冊子を考案し、それを活用してみる。⑤調整（合同）会議開催を実施し、その効果を確認し、病棟との連携を通してより有効な会議内容とする。以上のことを踏まえて教育支援プログラムと連携システム構築に必要な要点を整理する。

2. 研究の進捗状況

①学校の教員に対する啓発のための研修会 安城地区、浜松地区において、2008 年度～2010 年度に小学校・中学校の一般の教員、養護教諭、管理職（学校長や教頭）、特別支援コーディネーター、保健主事などを対象に毎年実施してきている。安城地区では対象病院と協力して毎年公募して研修会を開催している。また、愛知県が「小児がんの復学支援」をがん対策 5 カ年計画に組み込んで

おり、2009 年度から愛知県主催の医療者および主任養護教諭対象の研修会に招聘され講演を実施している。この間、研修会後アンケート調査を実施した結果、いずれも効果が確認されている。

②毎年 2 事例～3 事例の退院時調整会議を開催し、当初は地元の学校との日程調整など筆者が行っていたが、徐々にその必要性と方法が病棟や院内学級の教員に浸透し、学校との調整は院内学級の教員が、病棟ではプライマリナースが退院時の不安など、子どもと家族に事前情報収集をするようになり、解決へ向けての話し合いがスムーズにいくようになった。全部で 12 事例実施し、いずれも問題なく退院し、地元学校への復帰を果たしている。

③2009 年 8 月に、アメリカの New York の 3 つの病院と 1 つの支援団体の視察を行った。これらの施設では復学支援の体制が整備されており、コーディネーターは看護師を初め、CLS (Child Life Specialist)、臨床心理士、ケースワーカーなどがそれぞれの施設で勤めており、チームで実施していた。様々な復学支援のためのツールも開発され、学校に赴き、クラスメートに説明したりする活動も行っており、がんの子どもや家族の対応だけでなく、周囲への対応についても大変参考になった。

④2007 年に小学生、2008 年に中学生、2009 年に高校生への質問紙調査を実施し、がんの子どもがクラスに復学した場合という場面設定で、児童・生徒の意識を調査した結果、説明した場合としなかった場合では、説明した方がより、がんの子どもへの理解は高く、必要な情報は隠すことなく、適切に説明した方が復学してくる子どもへの理解と協力が

得られるのではないかということが示唆された。また、小学生用説明冊子を作成し、小学生に配布し説明したところ、わかりやすく、理解が得られており、この冊子は復学時の説明に活用できると思われた。そこで、実際の退院時、復学時の説明に、がんの子どもと保護者の了解を得て、担任に説明してもらったところ、有効であることがわかった。その後少しずつ保護者の意見も取り入れて修正して使用している段階である。

⑤2009年3月に退院時調整会議に協力してくれていた病棟看護師長や CLS の交代があったことから、連携研究者であり、医局長である医師、新旧の看護師長、他の連携協力者（小児看護教員）らと今後の方向性を話しあった。病棟側は今後も継続して調整会議を実施するという事になり、その後2事例実施し、ほぼ病棟主体で行われ、2010年度はオブザーバー的に関わった。

その他、調整会議後の学校の教員がどのような対応を実施し、復学したがんの子どもを支援したか確認するために、調整会議に参加した学校の教員に対して面接調査を実施し（研究協力者）、その支援のプロセスを明らかにすることができた。概ね調整会議での内容をうけ、教員は支援しており、子どもはスムーズな復学ができ、調整会議の有効性が確認できた。

3. 現在までの達成度

教員への啓発は計画的に実施できており、達成しているが、これをさらに拡大していく必要があるが、学校側では管理者の理解に差が大きく、研修会への参加を依頼しても関心を示されないことも多く、システム化するまでには至っていない。学校と医療の連携システムを構築するためには、双方の連絡調整が必要であり、院内学級の担任や病棟の協力無しでは調整会議の開催は困難であるが、現在のところ、協力体制は良好である。また、学校での説明用冊子も少しずつ改定し、さらによいものが出来上がりつつある。個性もあるため、基本的な内容にとどめる必要もある。アメリカではこれらの活動を基本的に一連の流れとして実施しているチームが結成されており、その人材配置が日本では困難な現状があり、どのように配置するかが課題である。

4. 今後の研究の推進方策

①啓発活動はできる限る実施し、対象者を増やして一人でも多くの教員に現状を理解してもらおう。
②説明用冊子はさらに精選し、広く病院や院内学級などに配布し、活用してもらおう。
③調整会議後の保護者の面接を進行中であり、調整会議で医療者としてさらに配慮すべ

き内容を見出し、より効果的な会議とするための示唆をえる。これらの結果と今後の課題を学会や紙上等で発表し、広く周囲の理解が得られるようにする。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

- ① 大見サキエ、三浦絵莉子、坪見利香、金城やす子、河合洋子、加藤千明、中島玲子、泉真由子、相曾容貴子、須場今朝子、アメリカNY州における小児がん患者の復学支援の現状① Stony Brook University Hospital における復学支援プログラム、小児看護、33巻3号、P. 390～P. 394、2010、査読無
- ② 大見サキエ、宮城島恭子、岡田周一、坂口公祥、三浦絵莉子、須永訓子、坪見利香、ALLで骨髄移植後再三の退院延期を余儀なくされた小学生の復学支援—初めて介入した調整会議が有効であった事例の検討—、小児がん看護、1巻5号、P. 78～P. 89、2010、査読有
- ③ 大見サキエ、がんの子どもが復学するときのクラスメートへの説明—小学校における場面想定法を用いた検討—、小児がん看護、1巻5号、P. 35～P. 42、2010、査読有
- ④ 大見サキエ、岡田周一、宮島雄二、宮城島恭子、須場今朝子、河合洋子、鈴木恵理子、高橋佐智子、坪見利香、がんの子どもへの理解促進と教育支援—養護教諭を対象とした研修会の効果—、日本育療学会誌（育療）、44巻、P. 30～P. 39、2009、査読有

〔学会発表〕（計18件）

- ① 大見サキエ、宮城島恭子、坪見利香、金城やす子、河合洋子、濱中喜代、加藤千明、がんの子どもへの復学支援に関する教員研修会の効果—特別支援教育コーディネーターの意識変容—、日本看護科学学会学術集会第30回大会、2010年12月4日、札幌コンベンションセンター
- ② 大見サキエ、坪見利香、松浦文則、宮城島恭子、加藤千明、高校生が入院から復学する際のクラスメートの反応(2) —背景との関係や説明の希望、復学者に対する気持ち—、日本小児保健学会第57回大会、2010年9月17日、新潟コンベンションセンター
- ③ 大見サキエ、宮城島恭子、坪見利香、脳腫瘍患児2事例の復学支援—退院時調整会議の有効性の検討—、日本看護研究学会学術集会第36回大会、2010年8月21日、コンベンションセンター